



金子みすゞ 1930年3月9日
死の前日に撮られた写真

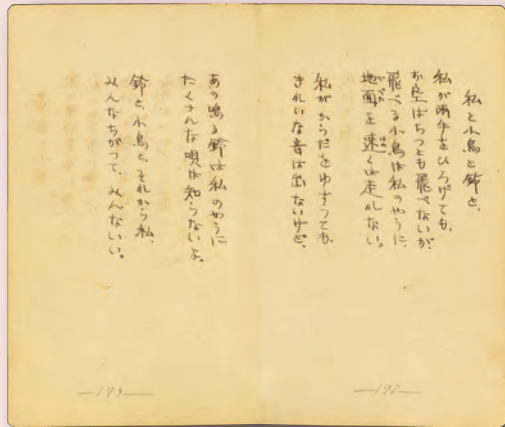
みんなちがって、みんないい。 —「私と小鳥と鈴と」より

こだまでしょうか、いいえ、誰でも。 —「こだまでしょうか」より

金子みすゞは、1903年、現在の山口県長門市に生まれました。大正末期から昭和初期にかけてすぐれた作品を発表し、雑誌「童話」の選者だった西條八十に「若い童謡詩人中の二個の巨星」の一人と称賛されましたが、詩業半ばにして1930年にその生涯を閉じました。

「幻の童謡詩人」とも呼ばれたみすゞの作品は、没後50年を経て童謡詩人・矢崎節夫氏の尽力により再発見され、現在の私たちに届けられました。時代を超えた輝きを放つ言葉の数々は、今も広く読者に親しまれています。

2020年は、みすゞの没後90年にあたります。本展では、みすゞの26年の生涯とやさしさに貫かれた作品の魅力を紹介し、彼女と並び「巨星」と称されたいわきゆかりの童謡詩人・島田忠夫(1904~1945)をあわせて紹介します。

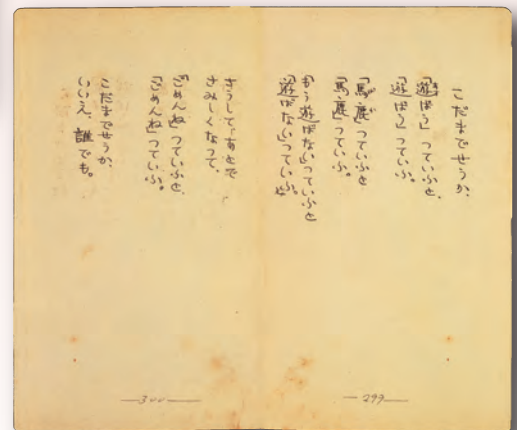
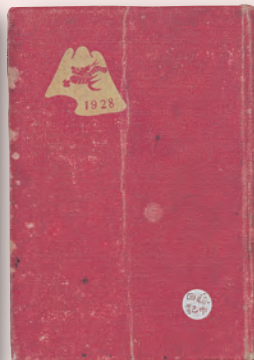
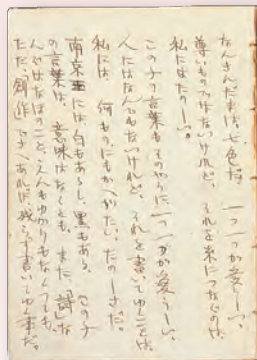


金子みすゞ自筆
「私と小鳥と鈴と」



金子みすゞ 3冊の遺稿手帳
左から第1童謡集『美しい町』、
第2童謡集『空のかあさま』、
第3童謡集『さみしい王女』

金子みすゞ『南京玉』
表紙とまえがき
娘の片言を書き留めた手帳



金子みすゞ自筆「こだまでしょうか」



『童話』新年号
1924年1月
コドモ社
金子みすゞ「砂の王国」、島田忠夫「ひとり」掲載

